

船 団

第108号

特集

官能の575



雨宮 しをん

蜘蛛の糸からまっている脳細胞
プレーヤーの針からエーゲの夕焼
鬼灯は応仁の乱より真つ赤
曼珠沙華一揆のごとく立ち上がる
大文字枠外に居てこんなもの
新涼を文結びして逢いに行く
蟋蟀の眼は草むらの斥候だ

杏中 清園

台風のパイアール二乗の外にあり
さんま飯さんまのサラダつみれ汁
秋の雲管に囲まれくだまかれ
麻酔から覚め目に入る望の月
留守の間に金木犀の散り果てぬ
パイを焼く守宮現わる午前二時
カラオケのマイク離さず神無月

● 会員作品 ●

池田 澄子

万両の実の鈴成りに今みどり
髪OK！顔も終って七五三
しかめっ面の坊や幸あれ千歳飴
十二月八日鈴成り雀どち
寝て寒き蛇はとぐるを巻き返すか
春はまだ浅し鞆の角擦れて
灯や皿に歓喜のレタスパセリ

一門 彰子

台風の去り行くゆっくりオルゴール
キツネノカミソリ頭脳明晰かも知れぬ
わたくしは地べたのヒメムカシヨモギ
蛇穴におたふく飴の売切れて
月光に鱗粉まじる鏡花の忌
長き夜の砂糖とミルク要りますか
友達が出来て石榴の口ひらく

植田 かつじ

旅の夜は大きな葡萄と決めている
リンドウの音のする方しない方
秋風が渋滞中とラジオから
こう見えて秋茄子実は肉体派
よくほどける靴ひもだもの秋の空
目の次は胸腰お尻キリギリス
橋渡るカボチャランタン隣り町

内田 美紗

夏痩せてベストセラーは読まざりき
水飴を引つ張り出しぬ獺祭忌
月の夜の岡持入る楽屋口
自転車に乗れないけれど天高し
葛原の向かうサーカステントかな
追ひつけぬ距離のずんずん芒原
秋しぐれ模型の街に灯の入りぬ

● 会員作品 ●

内野 聖子

寝返りの背中に月の光さす
切りすぎた前髪急ぎすぎた秋
昨日今日様子が違う曼珠沙華
頼りない三日月で繋がっている
ビリケンを撫で鹿を撫で秋の暮
くまさんのパンツ忍ばせ秋うらら
十三夜死んでもいいと返信を

宇都宮 哲

結界をよぎる覚悟やいぼむしり
秋の猫ギョロりと空を見上げおり
螻蛄鳴いて天下国家に乱れあり
然るべく身支度をして今朝の秋
鴨の声ストーンと辺り暗くなる
カラカラと笑う宗達秋深し
げんこつを握れば秋の遠ざかる

津田 このみ

菊膾骨まで美しき人よ

十三夜さらりと拒まれている

地ビールの「しらかば」干して冬うらら

村芝居ばらけて座る男たち

冬ぬくし町に三つのバレエ団

つわぶきや真ん丸眼鏡の山頭火

小鳥来るたつぷか愛されてばかり

土谷 倫

それぞれへ子らは去ぬなり秋の雲

舳い舟霧の帳の揚がるまで

蒼天へ紛れる船や秋気澄む

嫁した子の部屋開けてみる夜長かな

どこまでも絡み合うなり秋の蝶

柿日和リュックひとつの旅に出よ

マンモスの足跡化石星流る

● 会員作品 ●

津波古 江津

見わたせばわが爪先の秋湿り

鶏頭や立て膝を日の暮れてゆく

一瞬を深くねむって曼珠沙華

小箆箭をこわして風の真葛原

ヒマラヤの紅塩が降る秋の皿

秋の日のひとに翼の痕がある

秋天やひらかれている牛の耳

坪内 稔典

焼き芋を割ればほくほく兄弟も

ころがしておけ冬瓜とこのオレと

柿くえばパウエル・クレールと友だちに

柿くえば奈良が近づくと三センチ

カマキリの草色が乗り湖西線

秋うらら菓子の名前は電車みち

秋うらら会う人ごとに鼻を見て

長沼 佐智

路地裏の琴の忍音一葉忌

K君の右を下さい冬薔薇

青い空焼芋二本ほつかほか

乾かないようにカフエ入る青シヨール

走って走って突然黙る冬苺

秋の日の土の匂いとゴツホのほ

フランスへ行かない夜の新豆腐

中林 明美

竜淵に潜むまつ赤なハイヒール

うるこ雲背をまつすぐにネブライザー

平野郷秋を歩いているルンバ

立冬の狛犬包帯されたまま

メモをする男に飲めと爛の酒

鼻の穴かゆしドスンと冬が来た

飛び石の冬日にちよつと躓いて

● 会員作品 ●

中原 幸子

秋の蚊を追ったつぶした二秒見た

それ愛が原因ですよカンナ百

柚子絞る消えてゆくこと消えぬこと

鼻一個鼻の穴二個枇杷の花

お尻より小さな石にかけ小春

猿の目をまんまんまるに描く小春

芽吹きほわほわ飛行機雲は平行に

梨地 ことこ

月歌うさざめく水面覚める鳥

月へ月へスツポン歩む只歩む

梨の汁梨子地の黒をすべりゆく

目で語るなんて出来ない萩の花

ひと気なく人が戸惑う鴟日和

照る紅葉ひとり見るべし多勢の中に

秋の暮市中見下ろすここはこの世か

東 英幸

唇に葡萄の風の起るなり

秋場所の初日に負けた紙の牛

秋霖の雨戸を締める蒟蒻屋

川音の月を育てていたりけり

エレベーター最上階へ火の恋し

ななかまど私その赤欲しくなる

かりがねや大阪弁で暮れてゆく

火箱 ひろ

秋晴れの宇宙やっぱり暗いのか

柿の空父系に山羊のおじいさん

月光の窓辺の毬藻まどろんで

秋澄んで小鳥のための湖の椅子

柿日和あかるい弁当いただきます

友が来る紅葉の歌がうしろから

冬空に青が一枚自然主義

● 会員作品 ●

陽山 道子

仲直りしようかスダチ絞ろうか

秋天の黒猫ふいに芭蕉塚

野菊咲く岬は原発再稼働

霧の朝ブラックコーヒーは無糖

焼き芋を抱けばみんなが振り返る

ふりむけば冬銀河行き零ホーム

カーナビに少し逆らう十二月

平川 陽三

釣つた鯨今日休肝日タマの餌

髭振つて竈馬は心を明かさない

かつて野に数多の屍鴨黙り

極道が鼻めどひろげ赤い羽根

ゆき違ふ夫と妻とが焚火する

トクホンを貼り合ふために薬喰

スマホ掌にお爺のお守りねつき打